

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

「ままごと」の新聞は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2012年6月24日
発行元：ままごと

「街と演劇」

『あゆみ』ツアー

特に新潟について

柴 幸男 Yukio Shiba

いきなりだけど、計8箇所で開催した『あゆみ』ツアーについて書くには、文字数が足りない。それは三年間の創作記録になるだろうし、また僕自身の環境と考への変化についても書かなくてはならない。その一部は、セゾン文化財団のフリーペーパーに書かせてもらった。それぞれの地に出会い、楽しみも、悩みもあった。全体を語れないのなら、局所的に語ってみてはどうかと思う。三年間の結末を迎えたのは、新潟だった。

新潟の公演はリ्यूとびあで行った。Noismの名を聞いてから、ずっと気になっていた劇場だった。Noismとはリ्यूとび

最終稽古に一番の影響を与えている。ひとり、参加者に謎のおじさんがいて、意味不明なことを言っているように聞こえるのだけど、よく聞けば、そこには詩や、新潟の歴史が詰まっていた、なにより、その自由な言動が最高に面白い、不思議な人だった。僕もけっこうワークショップをやってきたけど、ここまでの逸材(?)はめったにいない。ワークショップには発表会もあつて、でも、どう考えてもこの人を型に押し込めてはいけないと、僕だけじゃなく、参加していた全員が考えた。どうしたら、この人の、面白さを発表に取り込めるか。俳優との関係に悩んでいた僕は、そのことをワークショップの参加者全員にそのまま話した。そして、みんな発表について考えた。結果から言えば、残念ながらそのおじさんは発表会には来られなかったのだけど(やはり、謎の理由で)、そのことは全員が残念がかったし、発表も最高の瞬間を逃してしまったと思っている。でも、全体の雰囲気、自由を認めようとしたときに、すこし浮遊したのを僕は忘れなかった。

そして、もうひとつ、僕がおぼえているのは、リ्यूとびあのおじさんで、本当に朝から夜まで、リハールをしている、Noismの姿だった。あれはたぶん研究生である、Noism2の方々だと思う。普段のリハール室は、演劇祭の会場にさせてもらっていたので、彼らはロビーのガラスを鏡の代わりに稽古していた。劇場に、一日中ずっと、稽古をしている人たちがいる。僕は、それだけのことにとても興奮した。この効果が、もっともといえる人々に届けたいのにと考えた。劇場に、作り手がいるというだけで、誰かに刺激を与える。少なくとも僕はもらった。存在自体に価値が生まれる、そんな未来を僕はいま夢想していたりする。

『あゆみ』が最終公演を行ったのは、4月末。新潟は、桜が満開だった。ツアー中での最高の芝居は、四国で50人のお客さんに観てもらった。新潟の公演は一度きり。中劇場の舞台上に上った、今までで一番大きな舞台で、負いわずやろうと、僕はみんなに伝えた。もうそれで十分だと思っていた。

新しい劇団を紹介したいという、リ्यूとびあの新事業として、ふさわしい仕事があったらどうか。その結果は、きっと第2弾の劇団が公演を行うときにわかるんだろう。願わくば、この事業がずっと継続され、いつか、またその枠で、公演をさせてもらいたいと思う。



3月の新潟、雪景色



4月末、新潟の桜



劇場の横を流れる信濃川



古町と劇場をつなぐ白山神社



『あゆみ』新潟公演アフタートークより。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。
日本大学芸術学部在学中に『ドドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞、同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

from新潟

「(勝手に)バトン受け取りました」
木澤美恵子

2010年に大阪で『あゆみ』を観て、すぐに新潟で上演してほしいと思いました。同時に、リ्यूとびあでの上演は多くの課題がみえました。

きっかけは、2011年にスタートした「三輪のミナト☆新潟演劇祭」でした。地元劇団やゲスト劇団の上演で、10日間フルに劇場・スタジオ・能楽堂が稼働し、人が行き交い、新しい空気が送られました。第2回演劇祭で、柴幸男さんのワークショップと新潟江南高校の『わが星』上演が決定し、やっと覚悟を決め、『あゆみ』をお願いできました。

笑ってしまうくらい必死でした。予定していたスタジオでの上演が難しくなると、「劇場舞台でやってください」と食いきがり、さらに「新シリーズの第1弾です！」とプレッシャーをかけ引き止めました。劇場内でも様々なハードルがありました。『あゆみ』への絶対的な信頼が、我々を走り続けさせました。新潟に旬の才能を紹介し、演劇の新たな魅力を伝える「NE/S/T(ネスト)」という新シリーズの最初として、新鮮で芸術性が高い『あゆみ』は、これ以上ない作品でした。

公演当日、劇場舞台が満席の観客で埋まり、『あゆみ』がスタートすると、気持ちは一緒に走っていました。それは対面の客席からも恐ろしいほど伝わってきました。成長した『あゆみ』を新潟の人たちと共有できた幸せな体験でした。

『あゆみ』との出会い、リ्यूとびあに、新しい枠組みと新しい空間、つまり劇場の新たな可能性をプレゼントしてくれました。2010年に名古屋で生まれ、大阪で出会った8人版『あゆみ』は新潟が千秋楽でした。勝手にバトンを渡された気持ちです。『あゆみ』が開いてくれた扉から、リ्यूとびあとして「NE/S/T」は歩き続けます。

さざわ・みえこ
75年新潟県出身。98年より新潟市芸術文化振興財団に勤務。リ्यूとびあ新潟市民芸術文化会館の能楽・演劇担当。

「ハートのビート。」 Vol.02

宮永琢生 制作

午前1時。下北沢。マクドナルド。終電のがしたあああああーっ!!……そろそろ31歳です。そんなワケで、今号でご紹介するのはこの一枚。あ、ホットコーヒーのSでお願いします。

JOYZ
『Pop-Ups』

KEYOSSIE (DOMINO88) & GAINEN (SRKIDS) として音楽監督の権藤知彦 (papu/anonymous) が生み出した現在進行形 TOKYO CITY POPの名盤。参加アーティストも谷中敦 (東京スカパラダイスオーケストラ)、カジヒデキ、曽我部恵一、「三石」鈴木圭介、ラフォーカンパニーと豪華。

特筆すべきは、鈴木慶一 (ムーンライダーズ) が作詞に参加した名曲「enradady」。今宵世界中の DANCE FLOOR で時間を忘れたシンパ、ラボーイズ&ガールズに贈る、JOYZからの LOVE MAGICTURE。この楽曲のライブ映像が、JOYZのホームページ <http://www.joysz.biz/> から視聴可能。そして必聴。

僕らは浮かれたまま繋いだその手で未来図を描く。混ざり合う光はただ歩き出す二人を照らした。……あれ、もう朝の光が。そろそろ夜の魔法が解けるみたい。ぐん。

Takuro Miyahara 東京都出身。プロデュースユニット ZUQUZ (ZACHOON) 主宰。

「いわきのこと」第2回

「いわきのこと」第2回

2011年7月、わたしは再びいわきを訪れました。

いわき地区では毎年6月、高校演劇の夏の地区大会の前に、順位をつけない合同発表会が行われているのですが、でもこの年は震災と原発事故があったので、新学期も、部活開始も、部員の勧誘も、すべてが遅れ遅れになってしまつたため、7月に開催されたのでした。

6月の「いわきのわが星」で高校演劇部員ワークシヨップの開催が可能となり、かつ必要とされたのも、そういう事情もあつたことなんです。

「わが星」最終形態と言える「いわきのわが星」ですが、その公演を客席で観てくれたのも、だから半分以上は、ワークシヨップを受けてくれた演劇部のみんなでした。朝からのワークシヨップでヘトヘトなのに、受付や誘導を手伝ってくれつつ、地球が生まれてから死ぬまでの物語を、客席から見守ってくれました。

わたしは、わたしもいつか彼らの作品を観たい、と思つてました。そうしたら、そのチャンスがあつたという間にやってきました、というわけだったので。この発表会で初演を迎えた「Red Wings for XIMAX」について、「今回のウチの作品、原発災害に対する怒りや震災の傷みへの祈りを形にしました。これ、福島以外のところでも上演したい。」という、いい感じのツイートをみて、わたしは翌日、「いわき行の高速バスに乗りました。(続く)



『わが星ワークシヨップ in いわき』(2011.6.5)

Niina Hashida 京都府出身。青年団所属。2011年、ままごと加入。五反田団、ハイバイ、チェルフィッチュなどにも出演。

「わたしの履歴書」二枚目

「わたしの履歴書」二枚目

さて、僕が履歴書の中でいつとう付き合いつづいて、特技欄、何を書けばいいか考えさせて下さい。世の役者さん方ほどのような特技を持っているのでしょうか、インターネットに聞いてみました。

イラスト、剣道、クラシックバレエ、手毬、パチンコ、魚をさばくこと、乗馬、スペイン語、粘土細工……。特技つてどの程度得意なのか分かりませんが、それなりのキャリアがあるのでしょうか。てことは、特技つて一朝一夕で身につくものじゃないのか。じゃあ新しく何かを身につけるより、これまでの経験から特技になりそうなものを探した方が早いのか。当たり前か。では20年間、僕はいつか何をしてきたのでしょうか。

大学時代は演劇。居酒屋と蕎麦屋でバイト。高校は帰宅部。肉屋でバイト。友人から教わったギターは半年で断念。中学はバスケット部。地区大会にも行けないチームの補欠。小学校は「昔あそびクラブ」という、あそびつて言い切っちゃってるクラブで、ベリーグマ、けん玉。習い事は、習字と水泳、そろばん。

今でも出来るそうなのは、そろばん、けん玉、あとビールジョッキを一度にたくさん運んだり、肉を一掴みでおおよそグラム分かるくらいでしょうか。そろばんけん玉、おそろしくパツとしませんが、パツとしない人柄が表れていいのかもしれない。知つたこつちやないですね。

Masahito Oishi 奈良県出身。2010年、ままごと加入。マームジブシー、田上ハル、ほなごにも出演。

NEXT

■ 柴幸男

【ワークシヨップ講師】
吉祥寺シアター演劇部
2012年8月1日[水]-5日[日]
@吉祥寺シアター

【作・演出】

愛知芸術文化センター
キッズ・プログラム
バックステージツアー
『げきじょうさん』
作・演出/柴幸男
2012年8月14日[火]
@愛知県芸術劇場 コンサートホール
&大ホール

【テキスト】

Borrowed Landscape-Yokohama #2
—横浜借景—
2012年8月下旬
@M/M GRAND CENTRAL TERRACE

■ 大石将弘

【出演】
toi presents 6th
『タイトル未定』
作・演出/藤田貴大(マーム&ジブシー)
2012年12月中旬
@横浜某所

編集後記

第2号の準備は、『朝がある』稽古中に進められました。作品に因りか、稽古開始時間はどんどん早まり、朝型の柴さんはどんどん元気に、大石さんは少々大変そうに(笑)見受けられました。次回、第3号もお楽しみに。(熊井)

企画・編集=ままごと
構成=熊井玲
デザイン=西山昭彦

『朝がある』稽古場より

今は6月初旬。も、もう終わるころ。劇場入りの二週間前になりました。お芝居は、ようやく折り返しはじめたぐらいでしょうか。ペースとしては決して早くはないけれど、いや、むしろ遅いんですけど、なんとなく焦らずにやれているのは、稽古場に発見が満ちているからでしょうか。いや、焦ってはいけません。いいますが、焦るのはいつものこと。今回は、朝の空気を大切に、無闇に焦らないよう心がけているのです。

稽古をはじめてからもつうか月半。いままでの時間は、「作り方」を作ってきたのだと思います。どこまで語れるのか、どこまでできるのか。自分たちのコントロールできる領域を知ること。無限から、自分たちが語りうる範囲を切り出す。そんな作業。生み出された方法や道具は、手元にあります。この道具を使つて、これから時間を削りだしていきます。今ある時間も、とても変です。演劇でもない、ダンスでもない、不思議な作品になるでしょう。

柴幸男

ままごと+三鷹市芸術文化センター presents 太宰治作品をモチーフにした演劇 第9回

「朝がある」 2012年6月2日(金) - 7月8日(日)
三鷹市芸術文化センター 星のホール

TICKET 一般 前売3,000円・当日3,500円 財団友の会会員 前売2,700円・当日3,150円
高校生以下1,000円 (前売・当日とも) ※全席自由・日時指定・整理番号付

	6/29金	30土	7/1日	2月	3火	4水	5木	6金	7土	8日
15:00	●	●	休			●			●	●
19:00		●	館						●	
19:30	●		日	●	●	●	●			

ままごとウェブサイト <http://www.mamagoto.org/>

作・演出：柴幸男
出演：大石将弘

チケット取り扱い
■ままごと (予約のみ)
<http://www.mamagoto.org/>
■チケットぴあ (Pコード419-257)
0570-02-9999 <http://t.pia.jp>
■カンフェティ
0120-240-540 <http://confetti-web.com>
■三鷹市芸術文化センター
0422-47-5122 <http://mitaka-art.jp>